

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第2号／1985年（昭和60年）8月1日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL0438-62-9121〕発行人＝石井哲夫／編集人＝明峯邦夫

染み込んだおでんの味の美味さかな

社会福祉法人嬉泉副理事長 須藤 祐司

「嬉泉の新聞」創刊、お目出とう御座居ます。須藤理事長と石井先生との出会いで誕生致しました社会福祉法人嬉泉も、はや二十年にならんとしております。狭い世田谷の土地より三万六千坪の広大な土地を有する袖ヶ浦の現施設に発展するまでには、石井先生をはじめ、奥村先生、その他多数の職員の方々の努力があったことを忘れてはなりません。さらには土地を保有するにあたり、手弁当で日夜御尽力下された中島理事も忘れてはならない御方です。心より感謝申し上げます。

さて嬉泉の大きな行事の一つにバザーがあります。私は石井先生が心をこめて一日煮込み、たっぷりだしの効いた風味豊かな美味しいおでんの味を忘れることが出来ません。私は先生のおでんのファンの一であり、バザーの前日にはおでん、焼きそば等が目の前をチラチラして、いてもたってもいられません。当日は朝食抜きで午前十時には到着するように出掛けますが、会場の近くでは職員の方々が、道路、駐車場等の案内に笑顔で対応しており、大変気持ちのよいものです。バザーの準備にはどれほど多くの人々の協力と手間がかかることでしょうか。数週間いや数ヶ月前から準備を要する展示品もあると思います。また袖ヶ浦でも大変な盛況で広い駐車場が

満杯になる程の出足には驚きました。会場では産地の新鮮な野菜や焼きイモの販売には人だかりが出来ており、ステージでは若人たちがバンドでムードを盛り上げ、祭気分をひきたてておりました。どの職員の方も笑顔でまめに働いており、仕事に生甲斐を感じて「楽しくて楽しくて仕方がない。」と感じる程生々と観えます。実際、福祉活動を支える人々には何よりも生甲斐が大切なのです。現在の金が全てであるかの如き世の動きとは対照的に世の人々に尽し、明るく生きるこの人々には心より敬意を表します。そんなことを考えながらも、朝食を抜いておりますので、会場見学もそこそこに、食堂へと向い、例の石井先生のおでんに箸を刺したとたん崩れそうな大根、ジャガイモ等を口いっぱいにはおぼり童心にかえた気分で、二杯、三杯とおかわりをして、満足感にひたっております。結局は日本一美味しいおでんやラーメン、焼きそばの味が忘れられず毎回出席させて戴いておりますが、職員の方々と石井先生との協調が今の嬉泉にまで発展させた源動力と考えております。

今後とも「福祉法人嬉泉」及び「嬉泉の新聞」が末永く発展し世を照らす光明とならん事を祈っております。

〔第21回バザーのご案内〕

期日＝10月27日（日） 会場＝子どもの生活研究所（小田急線千歳船橋駅下車）

めばえ 学園 の一日

家族の一人を施設に預けている
他の家族の人たちは、どのような
気持ちを抱いて暮しているものであ
ろうか。まさか厄介者がいなくな
って楽になったという気持ちだけ
はないだろう。昔、ある親が「こ
の子（自閉症児）がいなかったら
どんなにか生活が良くなるだろう」と
思い暮していたところ、この子
が丸一日迷子になったことがあり、
自分でも驚くほどの子と結びつ
いている自分の気持ちがあったこと
を知った。もう手放しません。と
話してくれたことがあった。私は
親の気持ちの正直な表現にうたれる
と共に、どんな親に会っても子ど
もへの気持ちを疑ってはならない
と、自分に言いかけたものだった。

今多くの親たちの申出で、預
かっている子どもたちを頻繁に家
に帰すようにしている。

このことについては、かなりの
抵抗もある。最初は親の中で、行
政当局に訴えた人もいたときいて
いる。この頃になって、親たちは
全て私の真意を理解してくるよ
うになってきているようである。
監査の折に「親からの訴えはな
なっているが、他の福祉施設から
の批判が強い」と言われる。これ

施設と家庭

常務理事

石井 哲夫

は、心外なことだと思っている。
児童憲章なり児童福祉法における
児童福祉の考え方について詳細に
検討してみたいと思っている
ことは、子どもを両親の揃って
いる家庭から離すという措置が、
児童の福祉をそこなうものであ
るなら、子どもを養護や監
護の上で、家庭なり親の援助を行
うという施設の役割を十分に認識
して欲しいからである。これは、
現行の措置制度の上では、施設入
所を判断した以上、施設の福祉処
遇が子どものためになるかなら
ないかを考えていくことが大切であ
ると思っている。ただ未だこの問
題に挑戦した施設がない以上は、

活をしている実状を親にみるとか、
その施設で職員達が何を考え、何
に悩んで暮しているかを知りたい
と思つて、職員と話をするとか、
施設長や理事者たちがどのような
構想をもつて、この施設をよりよ
く経営していこうとしているのか
を関心をもつて調べるなどしたく
ならないものだろうか。施設
は決して親たちに門戸を閉してい
るのでは無い。むしろ一緒になっ
て、この子たちを育てたいと思っ
ているのである。

これからの施設が、昔の施設の
ように暗く、みじめな姿になつて
しまつては困るのである。皆の力
で、社会にある他の機関（学校や
マーケットなど）より明るく楽し
い存在にしていきたいと思ってい
る。そのためには、もつともつと
家族の人たちの力を借りたいと思
っているのである。

まだ眠そうな顔でお母さんにか
かえられてくる子、ここに顔で
手をひかれてくる子、靴を脱ぐ間
もなく部屋に走りこんでくる子、
午前十時前後、こうして子どもた
ちが次々と登場し、めばえ学園の
一日がにぎわいととも始まる。

ここでは三つのグループがあり
二時までの間、グループによって
自由に遊んだり、課題を行ったり
また幼稚園のお友達と一緒に体操

やリトミックをしたり、そして給
食をたべたりという簡単な日
課を過ごす。その中で、二十五人
の子どもたちが、それぞれの関わ
りを通して、生き生きとした世界
を展開し始めている。

「オハヨッ」ドアのところで右
手をあげて大きな声で挨拶するの
はサミー君。タイからやってきた
五歳の男の子。四月にめばえ学園
に入園し、その中の一つのグルー

プ、ほのぼの組で日々活躍中であ
る。今日はこのサミー君に少しス
ポットライトをあててみることに
する。

始めの頃は、わからないことや
とまどうことが多いうえに、せつ
かく覚えてきたタイ語も通じない
ために、さぞ心細かったことだろ
う。落ちつかなくて乱暴になつた
りしたこともあったが、今ではだ
いぶ慣れたよう、ここでの生活

やまわりのことが少しづつわかっ
てきている。先生のやることをよ
く見ていて真似したり、口真似を
して、日本語も少しづつ言えるよ
うになってきた。

さてほのほの組での自由遊びの
時間、サミー君は何をしているの
だろう。さき程まで、先生に倣っ
て熱心にプラレールをつなげ、電
車を走らせたり、信号を操作した
りして遊んでいたが、見に来たお
友達がレールをはずしてしまうと
怒ってたちまちレールを放り投げ
て行ってしまった。今度は水鉄砲
を見つけたらしく「カウカウ……」
と何やら言いながら、先生に撃ち
つけている。先生が「やられたー
！」と倒れて見せると、ニヤッと
笑って走っていく。自分が撃たれ
ると「ウワーッ」と派手に倒れて
死んだふり。「サミー、だいじょ
うぶか、しっかりしろ」と揺り動
かされても白眼をむいてぐったり
している。迫真の演技である。
こうしてひととおり遊んだ後は
「おはよう」と課題の時間。椅子
に座っておはようの歌をうたい、
一人ずつ名前を呼ばれてから、絵
カードを見たり、主に運動的な課
題をするが、ここでは、場面に注
目したり、指示に応じたりするこ
とが求められる。課題の準備が始
まると、サミー君は走ってきて、
先生と一緒に「ヨイショ、ヨイシ

ヨ」と言いながら椅子を運んだり
呼んでも来ないお友だちを連れて
きたりしていたが、自分は座らず
に部屋の隅に行つて玩具をいじり
始めた。「サミー」と名前をよび
メガホンを向けると走ってきて、
「ハーン」と返事をしてくれるが
はずかしそうにまた走って行って
しまう。かなりのテレ屋さん。課
題のボール投げもそんな具合で、
最初はわざと顔でボールを受けたい
りしていたが、声援を送られてい

先日、仕事で会津若松へ行き、
県立短大の矢島博先生にお目にか
かりました。思いがけない出会い
にびっくりしている私に、矢島先
生は「浅野さんは元気でですか？」
「ほら、目の大きいやせたあの先
生、何という名前だっけ？」と今
法人設立二十周年に寄せて①

PERJMERJU

研究所発表のころ

は身近かにいない旧職員の近況を
いろいろ聞かれ、私も忘れていた
ことを次々と思ひだし、タイムカ
プセルで過去につれ戻された思い
でした。矢島先生は、社大から北
海道の大学へ変られた折、家族の
ように大事にしておられたウサギ

るうちに、力強くボールを受けた
り投げ返したりすることができ
るようになった。この場面が終ると
給食。サミー君は、ふりかけこ
んをおはしで上手に食べ、給食を
すませると、一足早く、一時にさ
ようならをする。まだ十分には慣
れていないからだ、いつも遊び
つきないように玩具をいじったり
トランポリンをとんだりしてから
玄関で「：ナラッ」と深々と礼を
して、お母さんに手をひかれてい

を私たちに託されていらしたので
す。そのうさぎのブーは、すこや
か学園、めばえ学園のマスケット
として、かなり長生きをして天寿
を全うしましたが、この「ウサギ
のブー」という短い一言から、多
くのイメージが連想され、当時生
活を共にしていた人々は、そのイ
メージを直接的に共有することが
できるのです。

我々の「子どもの生活研究所」
での象徴的イメージを代表する言
葉は、「ウサギのブー」のほかに
も勿論沢山あります。「お祭の盆
踊り」「組合の頃」など、その一
言で説明抜きにわかり合える言葉
がふえるということは、それだけ
歴史を重ねてきた証拠でしょう。
残念なことに（当然かもしれないま
せんが）このイメージを共有できる

庭では、給食を終えた子どもた
ちが、すでに自転車やブランコ、
水遊びなどをくり広げている。そ
して二時になると、きれいに身づ
くろいをされて、お母さんのもと
へ帰っていく。
ほのかな安堵とともにめばえ学
園の一日が終わる。
(大岩記)

人々が減ってくることは淋しいこ
とです。
今、百人を超える職員の生活の
中で、一言で伝わるイメージはど
のように生れつつあるのか、と思
うと、十数人で出発した時とは別
のむずかしさが山積みされてきて
いると感じます。
今に較べてはるかに樹木が多か
った環境の中に、それだけ場違い
な感じで立ちはだかっていた大き
な鉄門を、力まかせにギョッと開
くと、砂利というより、とがった
小石が敷きつめられた（何故そん
なもの敷いてあったか今だに解
らない、三歳児がころばないかと
いつも気になっていたものです）
車寄せ風の前庭の奥に玄関があり
板敷きの玄関の間の右手に、昔風
な「洋間」があつて、そこが事務

な「洋間」があつて、そこが事務

嬉泉の新聞第二部 ひかりのタイムス

未来

白紙の地図がある。

山岸由多加

人生という名の地図……。
俺はどうなっていくの……。

先の事は、わからない。
ただ、今の事を言えば
汚れた、大人の世界を、知って、
それでも、生きてく、自分が、嫌
になる。

それでも、大人になってくんだな
し。
子どもの頃、大人は、立派だとい
う、イメージがあった。
それが今はもろく崩れさろうとし
ている。

それを寛容に、ありのままに、受
けとめてる。
それだけに、辛く、悲しい。
話がやらずれた。テーマの未来に
戻す。

未来の日本は、俺の人生はどうな
るの
神のみぞが、知っている。
神よ…… 私はどのような、大人
になるのですか……。

それがわからぬまま、今をひたす
ら、歩く。
バラ色の未来……を夢見て、微笑
みうかべて、今日も、私は、前に
向って走る。

君は天使

山岸由多加

君は、天使
失恋に、苦しみ、打ちひしがれて
いた、ボクに、甘い恋のささやき
をそっとささやいた。「裕サン、
愛してる」とひと言

君は、ボクに、言った。
甘いバラ色の人生をその時ボクは
味わった。
その時悲しかった、失恋の想い出
は、ゴミ箱にポイと捨てた。

ボク、女の子に、求愛受けたの、
生れて始めてなんだ。
君は、天使
甘い甘い恋の楽しみを、ボクに、
教えた。

君と一緒に、いると、未来は、バ
ラ色さ……。
一緒に、手をつないで、明日の21

世紀を二人で行こう。
明るい君。いつも心に、太陽が、
輝やく君
そんな君 ボク……好き
花に、たとえれば、君はすみれの
ように質素で、可愛い。
そんな君と、一緒にいるいまが……
一番いい。先の事考えて、ガム
シヤラに 走っていく……よりいい
君がいるから、今のボクがある。

新学期の人事移動

伊藤訓育

- ① あゆみの主任田川昇氏から加藤由美氏に代わった。
- ② あゆみの先生も代わる。加藤 芦沢、佐藤真紀子氏になる。
- ③ ひかりのタイムスも山崎先生から明峯先生になる。
- ④ コーヒーサーブिसも山崎先生から、加藤、芦沢両先生となる。
- ⑤ 母子の先生とやすらぎの先生代わる。田中智世子、野村氏が山崎順子、浜中仁先生となる。
- ⑥ 又、多規子先生や仲尾正先生が入る。
- ⑦ ぼくの感想 五年間お世話になってきた山崎順子氏が母子入園棟に転出された。又、田川、浜田両先生も退職され、ぼくはさびしい。

室でした。

今よりヒマな時間がはるかに多かった石井先生が、事務室にデンと腰をすえていらつしゃると「石井先生、おぼけごっこしよう」と「すこやか」の子どもが誘いにきます。「ヨーシ」とやおら引き出しから引っぱり出した、気味の悪いゴムのお面をかぶって石井先生が立ち上ると、それだけでゾクゾクしてくるような表情の子どもたちが逃げまわります。あのお面はいつ失くなったのでしょうか。「めばえのゆたかちゃん」のために買った大きな地球儀は、ひどく大事な貴重品に思えました。ターちゃんがいいつも四本揃えてもっていた長い棒、菊池先生(今の島野先生)が不思議がって、ひそかに印をつけてみたら、ターちゃんは、常に同じ面を揃えているという発見があつて、何の変哲もない棒が急に意味ありげに思えてきたものでした。

(奥村幸子)